

赤穂浪士と阿波蜂須賀家 その深い関わり

大石内蔵助のルーツは蜂須賀家政だった。

徳島藩家老家に残した「いとま乞い状」から、
討ち入り前日の内蔵助の心情、そして徳島藩と
の深い絆に想いを馳せてみよう。

令和2年12月19日
徳島学博士 坪内 強

討ち入り前日 親戚へ心情

大石内蔵助の「遺書」が現存



大石内蔵助が、吉良邸に討ち入る前日に書いた手紙。討ち入る決意や永遠の別れを告げている（一部、個人蔵）

「忠臣蔵で知られる助が赤穂事件のあだ討つた、徳島藩の親戚からなくなっていた。宛ての手紙が現存していることが、徳島市の大石内蔵助は徳島藩赤穂藩家老、大石内蔵。ちを決意した心情をつ

60年間不明

徳島城博物館確認

つた、徳島藩の親戚からなくなっていた。宛ての手紙が現存していることが、徳島市の大石内蔵助は徳島藩赤穂藩家老、大石内蔵。ちを決意した心情をつ



大石内蔵助画像（東京大学史料編纂所蔵）

平成30年11月1日 徳島新聞朝刊

赤穂藩の家老大石内蔵助が、事件前日に徳島藩の親戚に宛てた「遺書」が約60年ぶりに公開された。

旧暦の12月14日は、「忠臣蔵」で知られる赤穂事件の起こった日。

赤穂浪士四十七士の頭領である赤穂藩家老大石内蔵助良雄のルーツが徳島藩祖蜂須賀家政に行き着くことはほとんど知られていない。

また、内蔵助は討ち入る決意を書いた手紙を、親戚の同藩家老に残していた。

徳島新聞より抜粋

赤穂事件とは

江戸城松之大廊下で高家の吉良上野介義央よしひさに斬りつけたとして、赤穂藩藩主の浅野内匠頭長矩が切腹に処せられた事件。

更に、1702年12月14日の深夜、亡主・浅野内匠頭の仇である吉良上野介の屋敷に討ち入り、吉良および家人を殺害した事件を指す。

赤穂浪士とは、この討ち入りに参加した大石内蔵助を含む47人の武士のことを指す。

後にこの事件は、「主君に対する忠義心」を題材とした歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」として人気を博し、通称「忠臣蔵」として世に知られるようになった。

彼らの忠義心をたたえて「赤穂義士」とも呼ばれている。

- 堀部弥兵衛が討ち入り前に書いた『堀部弥兵衛金丸私記』には、原因が「吉良の悪口」にあると記している。

伝奏屋敷において、吉良上野介殿品々悪口（あっこう）共御座候へ共、御役儀大切に存じ、内匠頭堪忍仕り候処、

殿中において、諸人の前に武士道立たざる様に至極悪口致され候由、これに依り、其の場を逃し候ては後々までの恥辱と存じ、仕らすと存じ候

口語訳

（伝奏屋敷で、吉良上野介殿がいろいろと悪しざまにおっしゃいました。御役儀を大切に考え、内匠頭は堪忍しておりましたが、

殿中において、諸人を前にして武士道が立たないようなひどいお言葉をかけられましたので、そのままにしておくとは後々までの恥辱と**思い、斬りかけたもの**と存じております)

真の原因は、まだ判っていない？。

- 『江赤見聞記』・『堀部武庸筆記』・『義士墨跡』・「多門伝八郎筆記」・『人々心覚』・『寺坂信行筆記』・『富森筆記』・『赤穂鍾秀記』・『赤穂義人纂書』・『徂徠儀律書』・『柳沢家秘蔵実記』等、赤穂事件に関する多くの資料が残っているが、公式記録は少なく**個人の手紙や日記**が殆どである。
- 刃傷の発生の様子を記録している「**梶川与惣兵衛日記**」には「此間の遺恨覺えたるか」と聲を懸け、切付け申候と書かれているが、遺恨の原因はわからない。
- 「**多門おかど伝八郎筆記**」は、検使役の多門が書いた資料だが、内匠頭に肩入れが過ぎ、真偽が疑問視される記述もある。
- 徳川家の公式記録である「**徳川実記**」には「**吉良が賄賂を要求したという噂が流れた**」とだけ記述されている。
- いずれも決定版となるものはなく、**真の原因はわかっていない**と言われている。

「吉良殿、お痛み軽く」西本願寺が上野介聴取 忠臣蔵記録、本願寺史料研究所で見つかる



西本願寺の4月5日付の手紙では「浅野内匠頭殿の**乱心の様子**を承りたい」とされ「事件直後の3月下旬、西本願寺はすでに『乱心』という情報を得ていた。

10日付の手紙では、「吉良上野介殿、松之坊とご直談、ご口上の内容を宗主に披露を遂げた」とし、西本願寺側が上野介に事件の事情聴取をしたことが示されている。

饗応役とは

- 毎年正月、将軍から朝廷に対し、高家を年始の賀使として送り、朝廷からその答礼として2月下旬頃に、勅使が江戸に差遣される。
- これを勅使参向と呼び、彼らの江戸滞在中の饗応役が、5万石位の外様大名の中から任命される。御馳走役ともいう。
- 江戸へ下向した勅使と院使は江戸にいる間は幕府の伝奏屋敷に滞在する。
- ここで御馳走をふるまったり、高価な進物を献上したり、勅使院使の行く先の諸々の応待をするのが饗応役である。
- 饗応役は大名の義務であり、一種の名誉でもあった。
- 武家大名が饗応役に任じられるために典礼に暗く、このため高家肝煎の指導が必要となる。
- 元禄14年、浅野内匠頭は此の饗応役を命ぜられ、吉良上野介が指導役となった。

元禄14年、特にこの年は、**綱吉が最愛の母**を慣例に反してまで**従一位**に推そうとしていたため、綱吉は公家の接待に熱心であり、例年よりも緊張を強いられた。

浅野内匠頭はこの時**二度目**の勅使御馳走役であったが、**前回**は江戸家老の**大石良重**が補佐しており、上野介にも上手く対応していたと思われる。

今回補佐した江戸家老は、藤井宗茂と安井彦右衛門であり、無能?な二人は「高家たる吉良殿へ大げさな贈り物を差し上げるのは返って失礼と、**巻絹一台と鯉節一連**（2本）だけを贈ったらしい。「元禄快拳録」
（慣習は御馬代として事前、事後に**各大判1枚**（約100万円））

吉良に対する「付届け」等に配慮が行き届かず、吉良を怒らせ、逆に自分達の不手際を隠して、内匠頭に上野介を悪く伝えたとも言われている。

二人は、事件後、責任を取ることもなく、さらに主君の恨みを晴らす吉良邸への討ち入りにも参加せずに逃げ去ったらしい。

饗応費用について

浅野長矩が天和三年（1683年）に勤めた時には400両かかった。

伊藤出雲守が元禄十年（1697年）に勤めた時には1200両かかったと言われている。

元禄十四年には更に物価も上がっているのに、浅野長矩が700両に抑えようとしたのが揉め事の原因だとの説がある。

元禄八年に、勘定吟味役の荻原重秀は貨幣の金銀含有量を下げ、通貨量を増大させる貨幣改鑄を行った。

幕府はその差益528万両で潤ったが、江戸市中は金本位であったことに加えて元禄十一年の大火もあって、ものすごいインフレに襲われた。

浅野長矩は、現実的な金銭感覚に疎かったのかも知れない。

勅使饗応役

- 寛文 8年（1668年）：**浅野長直**（播磨赤穂初代藩主5万3,000石）
- 天和 3年（1683年）：**浅野長矩**（播磨赤穂藩主5万3,000石）
江戸家老大石頼母助良重が補佐
- 中略
- 元禄 9年（1696年）：**浅野長澄**（備後三次藩主5万石）阿久里の甥
- 元禄10年（1697年）：伊東祐実（日向飢肥藩主5万1,000石）
- 中略
- 元禄14年（1701年）：**浅野長矩**→戸田忠真（下総佐倉藩主5万3,500石）
- 元禄15年（1702年）：**蜂須賀隆重**（阿波富田藩主5万石）

高家肝煎こうけきもいり

- **高家**（こうけ）は、江戸幕府における**儀式**や**典礼**を司る役職。また、この職に就くことのできる家格の旗本を指す。
- **吉良氏**は足利一門において名門とされ、分家の今川家とともに**足利將軍家の連枝としての家格**を有した。
- その格式は「**御所（足利將軍家）が絶えれば吉良が継ぎ、吉良が絶えれば今川が継ぐ**」とまで言われた。
- ただ、三河でも奥州でも**家格の高さに武力が伴わず、家運は低迷**、大名としての存続は断たれた。
- これほど家運も振るわず困窮していながら、足利一門における名族中の名族たる**誇りだけは強かった**。
- その後、義央の祖父の代に家康に取り立てられ、旧吉良荘内で3,000石（後に4,200石）を領して、高家筆頭の家格を付与された。

上杉家 会津120万石から米沢15万石へ減封

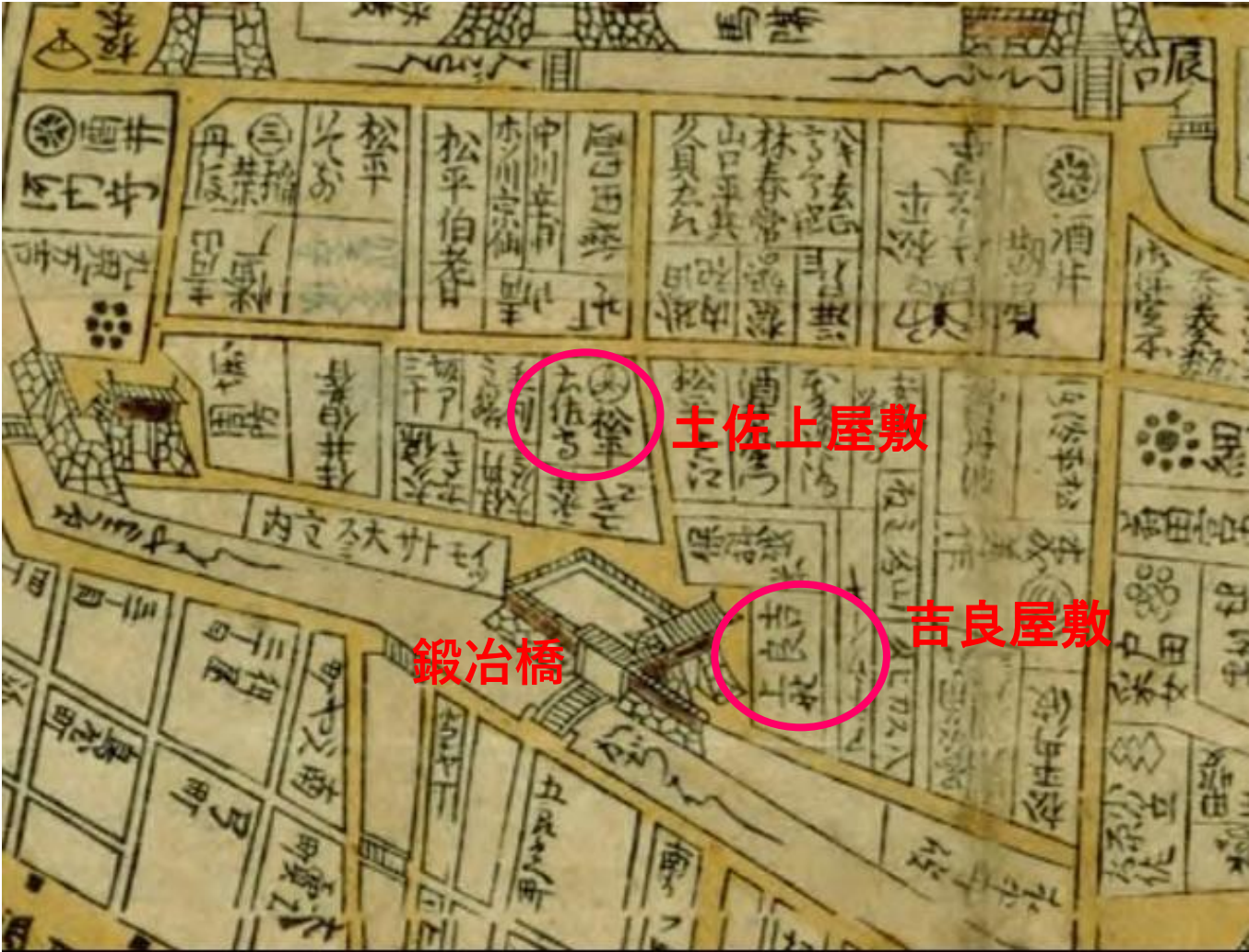
- 越後春日山から上杉景勝が会津に入部した。
- 領地は120万石であった。
- 関ヶ原の戦いの後、90万石を没収のうえ米沢30万石へ減移封された。景勝は、家臣6000人を見放さずそのまま召抱えた。
- 景勝の死後、家督は定勝、綱勝が継いだ。
- しかし寛文4年に綱勝は嫡子も養子も無いままに急死。
- このため上杉家は無嗣断絶の危機となる。
- 其のため、綱勝の妹富子と高家の吉良義央との間に生まれていた当時2歳の綱憲を末期養子とした。
- ただし所領に関しては、15万石が没収されて15万石と元の1/8となった。

吉良殿の強欲によって上杉家が傾く

- 吉良に嫁いだ富子は、実家上杉家から**化粧料**（持参金）として**6000両**を持参。
- 延宝4年、吉良家の**借金6000両**を肩代わり。
- **毎年**、富子に5000石、上野介に1000石、合計**6000石**を計上。
- 元禄11年、大火により、**鍛冶橋御門**内の吉良邸が**類焼**した。
- 新築した呉服橋邸(2700坪)の建設費に、**上杉綱憲**は、**建築資金2万5500両**を援助している。
- 元禄14年8月19日、吉良上野介は、呉服橋邸から**本所に屋敷替え**を命じられた。建坪は846坪、土地面積は2550坪もあった。
- 景勝の時に15万両あった蓄えは、綱勝が死んだ時には6万両（12億円）**上杉綱憲の時代にはゼロ**となり、後には借金が膨らんで行った。



元禄9年の大火以前の鍛冶橋門内の吉良屋敷。土佐藩上屋敷のすぐ近くにある。



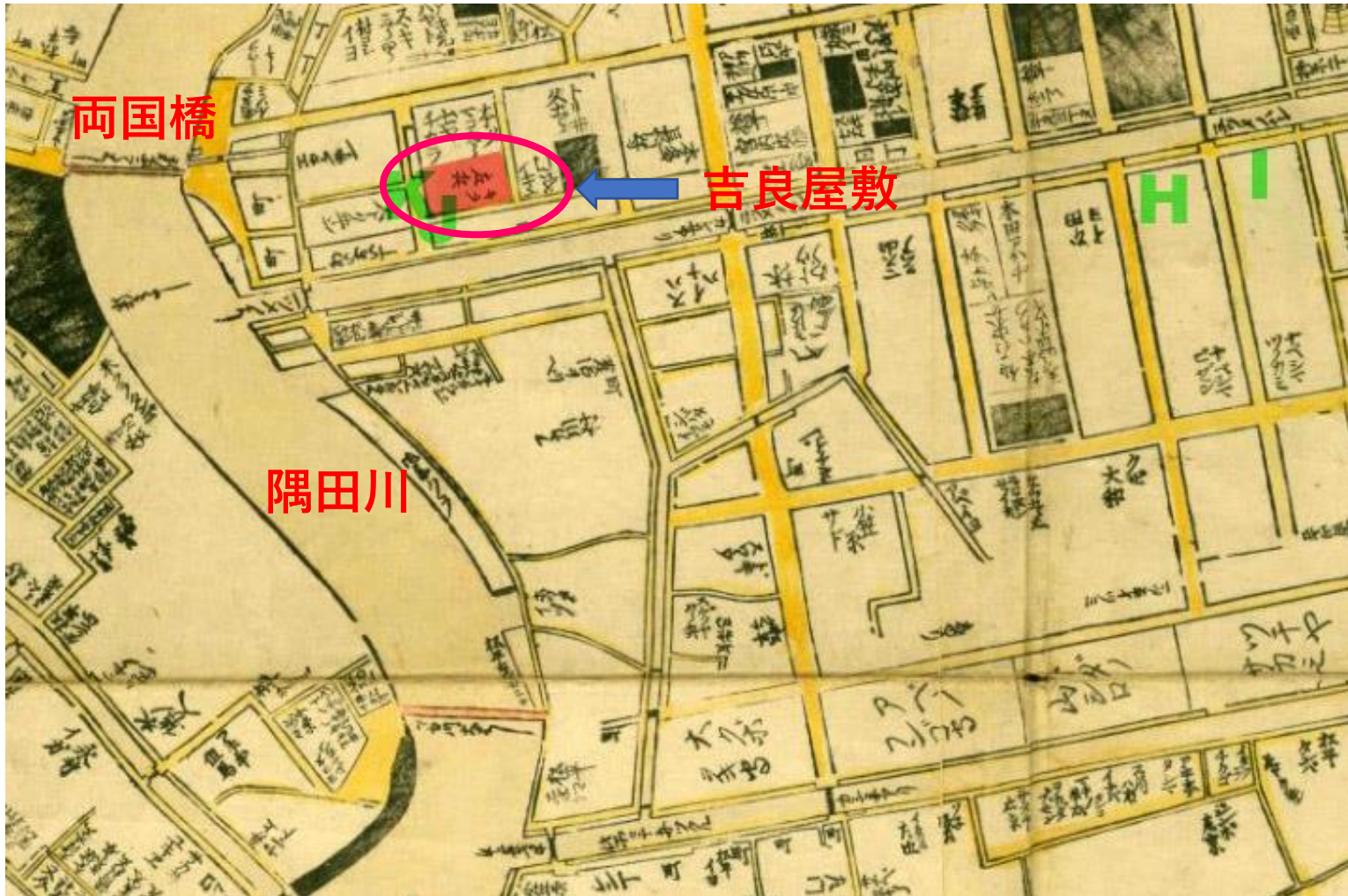
元禄14年頃の呉服橋 吉良屋敷 蜂須賀飛驒守の隣りにある

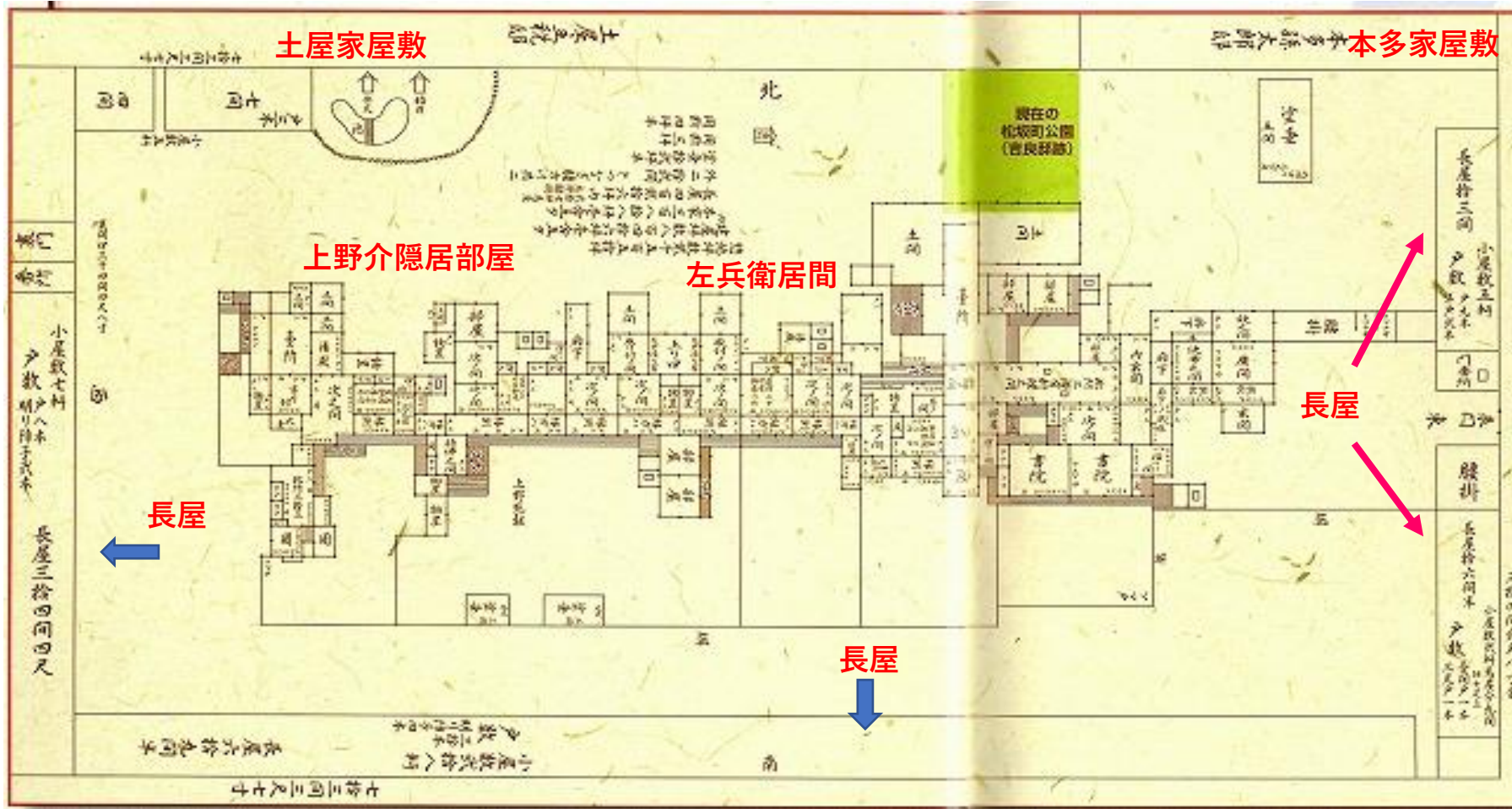


- 吉良の鍛冶橋屋敷は、元禄9年の勅額火事により焼失したため、新たに呉服橋門内に屋敷を拝領した。松之大廊下の刃傷事件の時には、呉服橋門内に屋敷があった。
- しかし、刃傷事件後、高家肝煎の辞任を申し出る。
- それが認められ、元禄14年8月に呉服橋門内から隅田川の両国橋を渡った本所に引き移るように指示される。
- 隅田川の西が武蔵の国、隅田川の東が下総の国だった。つまり本所は元は下総の国であり、江戸町奉行の支配は隅田川の西側までであった。
- 吉良家の移転については 隣の徳島富田藩蜂須賀家の働きかけがあったという話が「堀部武庸（たけつね）筆記」に載っている。
- 本所の屋敷は、元は旗本の松平登之助の屋敷で、空屋敷となっていた屋敷を拝領したものだ。



本所吉良屋敷





- 「表門」は東にあり、入って左に腰掛（供廻りの者の控え所）、それに続いて長屋16間半、右に門番所とそれに続く長屋13間、
- 「裏門」は西側に画して北寄りにあり、南寄りに番所、長屋34間四尺、南側には長屋69間半（小屋敷28軒）がある。
- 北側の西寄りには小屋敷5軒分があり、それに並んで近松勘六が落ちた池があって橋がかかり、弁天橋とお稻荷さんの詞がある。
『実録忠臣蔵』
- 屋敷の大きさは、**南北**が、約34間（約**63m**）、**東西**の長さが約74間（約**135m**）。面積は、約2550坪8500m²。サッカーグラウンド約7100 m²より広い。
- 表門側に、吉良左兵衛の住む部屋があり、吉良上野介の住む隠居部屋は、裏門側にあった。
- 隠居部屋側にも玄関があり、ここから出入りが可能となっている。吉良上野介の部屋近くには茶室もあった。

- 屋敷の道路に面した三方向には**450坪もある長屋**が設置されていた。
- **長屋には、吉良家の家臣が住んでいた**。当然、上杉家から派遣された武士も、そこに滞在していた。(100~150人程居たととも)
- この長屋は二階建てであり、屋根までの高さは6.6mあり、簡単に乗り越えられないので、赤穂浪士は梯子を準備した。
- 長屋は小屋敷に分かれていて、屋敷の三方向を囲んでいる。
- 南の長屋には小屋敷が28軒もあり、出入口や窓も多かった。
- **戦った家臣**は清水一角(吉良の家臣)、小林平八郎、新貝与七郎(上杉家の家臣)等の**死者17人**(茶坊主 2名 中間 1名(門番)を含む)と吉良義周、山吉新八郎等の**負傷者23人の計40人**。
- **逃亡者は4人**。他は中間、小者等の**非戦闘員が89人**。(幕府の検死役の書による)
- **家老**の斎藤宮内と左右田孫兵衛は長屋の壁を蹴破って**逃げ出した**。

吉良義央は普段本所屋敷には住んでいなかった？

刃傷事件後に上杉綱憲は生母・富子を白金屋敷へ引き取っている。

元禄14年12月、吉良義央は隠居すると**白金の屋敷**に住んで、綱憲や本所の義周の見舞いに行ったり、茶の湯に出かけたりしていた。

(1) 「弾正大弼(**綱憲**)殿午の夏頃より御**病氣**にて、冬に至り候ても、御大切之御様躰に御座候間、**上野介殿昼夜弾正殿に御座候**由相聞、又は**茶之湯御好**にて、其会に御忍び候て脇々へも御越、御手前へも御客切々御座候て、とかく能首尾無之候」(『江赤見聞記』)

(2) 「**上州**或は**上杉の館に停留**し、又或時は**左兵衛**(吉良義周)方に住せしむ」(『忠誠後鑑録』)

(3) 「上野介には折々**本庄之屋敷御子息左兵衛佐様**に御見舞として御越、二三日程づゝ屋敷に御逗留にて又**上杉弾正様屋敷へ御戻り**候由」(『桑名藩所伝覚書』)

吉良左兵衛義周 (きらさひょうえよしちか)

- 米沢藩主・上杉綱憲の次男で、5歳の時に**実の祖父**である**吉良上野介義央の養子**となる。
- 討ち入り当時、上野介は隠居していたので吉良家の正式な当主は18歳の義周であった。
- 討ち入り時には、病身ながら義周は複数の浪士を相手に自ら薙刀を持って奮戦。額や肩を斬られたほか、肋骨も折るなどの重傷を負い気を失った。
- 討ち入り後、義周は「**振る舞い不届き至極**」という理不尽な理由で領地没収、諏訪家に罪人としてお預けという処分となる。
- 元禄16年2月11日、義周は囚人駕籠に乗せられ、江戸を出発。随行が許された家臣は山吉新八郎等の2人だけであった。
- 義周は三年後に21歳で亡くなり、遺体は塩漬けにして、法華寺に埋葬。しかし、所持金が3両しかなく、やむを得ず自然石の墓を建立したという悲しい最後であった。**赤穂事件の一番の被害者**とも言われている。

討ち入りその後

大石大三郎

徳川綱吉が死去、家継の時代に赤穂浪士が称賛されるようになる。内蔵助の遺児である大三郎を浅野本家が欲しがり、大三郎が12歳になった正徳3年に広島藩仕官が決まり、豊岡を出て広島へ移った。**広島藩**では父良雄と同じ**1500石の知行**と広島城二の丸に屋敷を与えられた

浅野長広(大学)

元禄14年兄・長矩が切腹となると、3,000石の所領も召し上げられた。翌年7月に広島浅野宗家にお預けとされる。なお長広自身は、お預かり中に宗家から1,000俵が支給された。

宝永6年、将軍綱吉死去に伴う大赦で許され、宝永7年には新将軍徳川家宣から安房国朝夷郡・平郡に**500石の所領を賜り旗本に復し御家再興**を果たした。

またこれとは別に浅野宗家からも300石を支給され続けた。

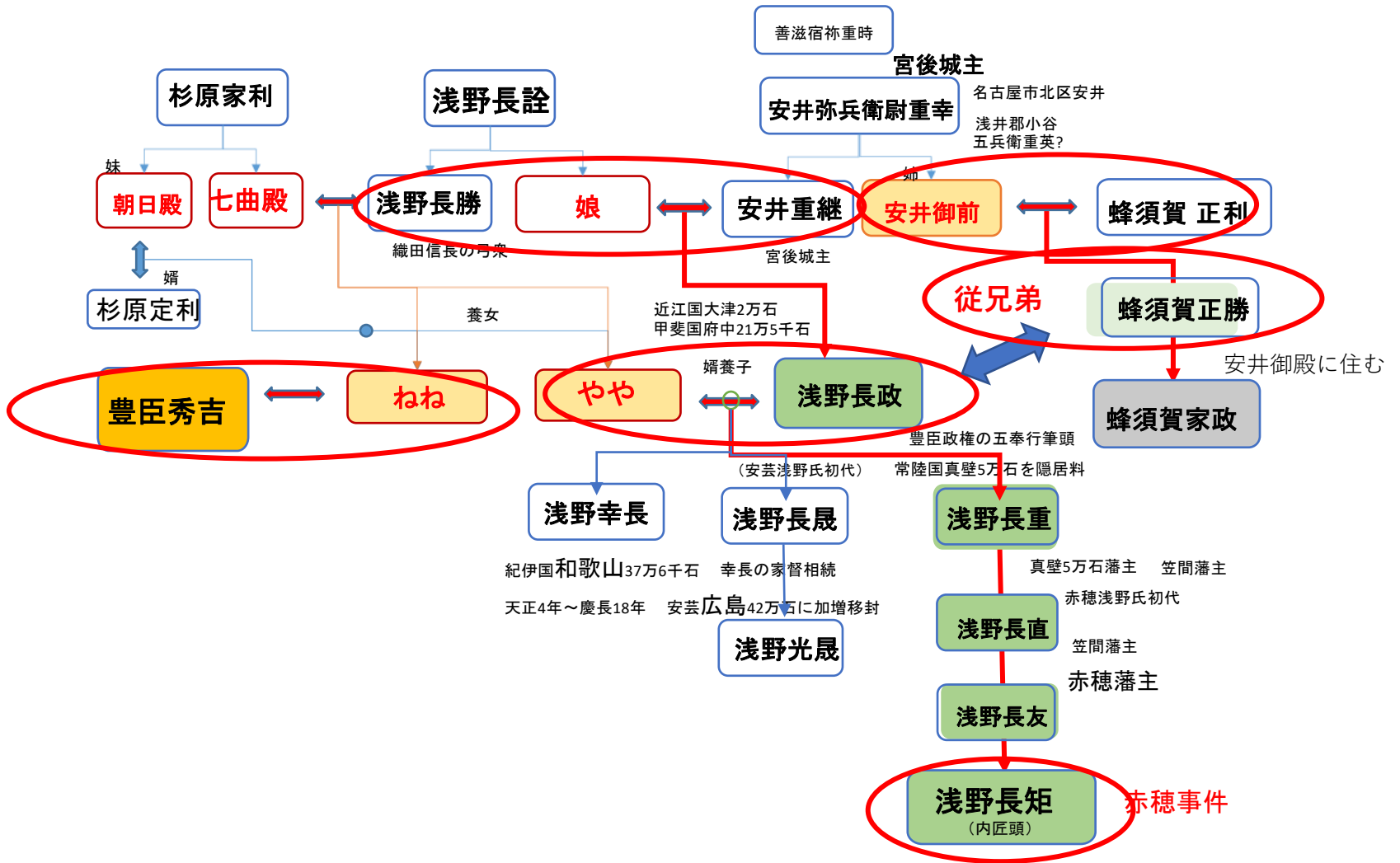
浅野家と蜂須賀家

- 蜂須賀正勝は1553年に、父正利と共に織田信秀に追われて蜂須賀村を出て、江南市宮後町(母、安井御前の故郷・宮後城)に移り、美濃の齋藤道三に仕えたとされる。
- 1557年頃、宮後城から約3kmと近い、小折(愛知県江南市)の武家商人・生駒家の食客となった。
- 1554年に養子の東獄、1558年に実子の家政が誕生しているので、正室の大匠院(松、まつ)と結婚したのも、宮後城に移った頃と考えられる。
- 東岳禅師が曼荼羅寺で仏門に入ったり、家政が曼荼羅寺で勉学に励んだ事、そして家政が阿波の藩主となった後、宮後八幡宮や曼荼羅寺の正堂を寄進、再建した事などから、正勝そして家政が宮ノ後の安井屋敷に一時居住していた事は間違いない。

浅野長政

- **正勝の母「安井御前」**の父は尾張宮後城主・安井重幸。
- **浅野長政**は、安井御前の弟の**安井重継**と、母(浅野長詮の娘)の間に生まれる。
- 父・安井重継は、甥である蜂須賀正勝に家督を譲り、安井家は蜂須賀家へ吸収され、**安井屋敷は蜂須賀屋敷**と呼ばれるようになる。
- 長政は、叔父・**浅野長勝**の娘・**やや**の婿養子となる。
- 浅野家には、浅野長勝の養女の、**ねね**(のちの秀吉の正室、高台院)がいた。
- その縁で、浅野長政は、豊臣秀吉の与力となり、天正12年(1584年)には京都奉行職となり、のちに豊臣政権下で五奉行の筆頭となる。

安井家、浅野家、杉原家、蜂須賀家



- 長政は、天正15年（1587年）、若狭国小浜8万石そして、文禄2年（1593年）、甲斐国府中21万5千石を与えられて甲府城に入る。
- 慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いでは家康を支持し、長男の幸長は東軍の先鋒として岐阜城を攻め落とし、関ヶ原の本戦で活躍した。
- 戦後、幸長はこの功績により紀伊国和歌山37万石へ加増転封された。
- 慶長11年、長政には常陸国真壁5万石が隠居料として与えられた。慶長16年、真壁陣屋にて死去。享年65。
- 真壁5万石は三男・長重が継いだ。

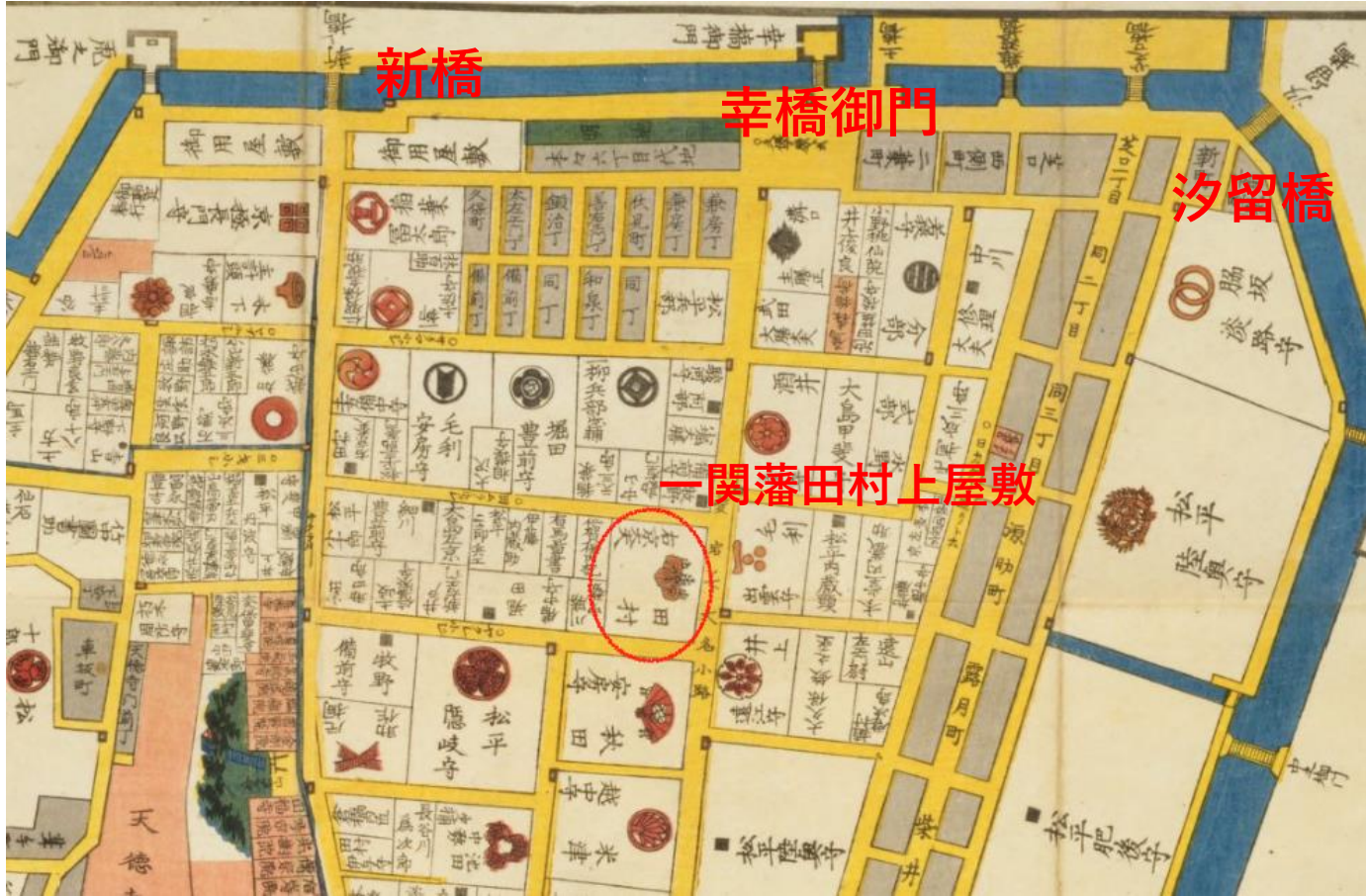
- 長重は、慶長19年の大坂冬の陣にも出陣し、夏の陣の天王寺・岡山の戦いでは先陣をきって豊臣方と戦った。
- また同戦では大石良勝が活躍し、この戦功をもって1500石を拝領し筆頭家老となった大石家は、（長重流）浅野家の永代家老家とされた。
- 長男の長直は、同11年には幕府より駿府城城代に任じられ、同13年に大坂城の加番を命じられた。
- この在番中、赤穂藩主の池田輝興が正室の黒田長政の娘を殺害する事件が起こり、池田家は改易となった。
- この改易処分の際、城受け取りに赤穂へ赴いた浅野長直は、そのまま国替え・赤穂藩主を命じられた。

池田輝興（てるおき）の乱心

池田輝興は、慶長16年（1611）、播磨姫路藩主池田輝政の六男として姫路城で生まれる。母は徳川家康の次女督姫。

- 輝興は黒田長政の息女亀姫を正室に迎え、3万5000石の赤穂藩主となる。
- ところが、正保2年3月、輝興は突如として乱行に及び、正室亀姫や侍女数人を斬殺した。
- 赤穂藩の池田家は改易となり、城受け取りに赤穂へ赴いた浅野長直は、そのまま国替えとなり、赤穂藩主となった。
- 江戸の赤穂池田家の屋敷は、取り壊され、その土地に一関城主田村家の屋敷が建てられた。
- それから56年後、その田村家の屋敷で、切腹させられたのが、なんと浅野長矩だった。

新橋四丁目の田村家上屋敷



浅野長矩(浅野内匠頭)

- 寛文7年（1667年）、浅野長直の子、長友の長男として江戸鉄砲洲にある浅野家上屋敷において生まれる。母は鳥羽藩主・内藤忠政の娘・波知。
- 寛文11年3月に父・長友が藩主に就任したが、その3年後の延宝3年1月に死去。
- また生母である波知も寛文12年12月に亡くなっており、長矩は幼少期に父も母も失った。
- 延宝3年（1675年）、長矩は9歳で赤穂浅野家の家督を継ぎ、第3代藩主となる。
- さらに同年、三次みよし藩主・浅野長治の娘・阿久里姫との縁組が決まった。これにより阿久里は延宝6年（1678年）より赤穂藩の鉄砲洲上屋敷へ移った。

長矩の生母「波知」の弟 内藤忠勝の芝増上寺刃傷事件

- 忠勝は延宝8年、第4代将軍・徳川家綱の77日法要に際し、**芝増上寺参詣口門の警備**を命ぜられる。
- 普段から仲の悪かった永井尚長は、忠勝を侮り、老中から受けた翌日の指示を記した奉書を忠勝に見せず立ち去ろうとした。
- 忠勝は奉書を見せるように求めたが、尚長は無視した。
- 忠勝はこれを恨んで脇差を抜いて尚長に迫り、逃げる尚長の長袴を踏み、尚長が前のめりに転んだところを**刺殺**した。
- このため忠勝は**切腹**を命じられ、**御家断絶**とされた。
- **甥の浅野長矩**が、21年後に同様の事件を起こして**同じ末路**をたどることになる。
- これは**内藤家の遺伝**が長矩に受け継がれたのではないとも言われている。

- 浅野長矩
- 天和元年（1681年）、15歳にして山鹿素行に入門して山鹿流兵学を学ぶようになる。
- 天和2年（1682年）には幕府より朝鮮通信使饗応役の1人に選ばれ、長矩は、来日した通信使を8月9日に伊豆三島にて饗応した。
- 天和3年（1683年）には、靈元天皇の勅使である花山院定誠・千種有能の饗応役を拝命し、二人の饗応にあたった。
- このとき高家・吉良義央が勅使饗応指南役として付いていたが、浅野は勅使饗応役を無事務め上げている。
- 勅使饗応役のお役目が終わった直後の5月に阿久里と正式に結婚。
- そして元禄14年2月4日（1701年3月13日）、二度目の勅使饗応役を拝命することとなる。

阿久里（あぐり/おくり） 瑤泉院ようぜんいん

- 初代備後国三次みよし藩主の浅野長治の三女。母は浅野長重（浅野長矩の曾祖父）の娘。三次藩士の落合勝信がお付きの用人として付けられ、彼女の養育に当たった。
- 生まれてすぐに浅野長矩との縁組が進められ、天和3年正月に婚儀が執り行われて正式に長矩室となった。
- しかし元禄14年、赤穂藩は改易となる。
- 阿久里は16日には赤坂にある実家の三次浅野家下屋敷に引き取られ、落飾して夫の菩提を弔った。
- 大石良雄らが吉良邸討ち入りを決定すると、瑤泉院は自身の化粧料である赤穂の塩田から上がった運上銀を大石に託し、彼らの生活を陰ながら支えた。

「南部坂雪の別れ」

- 討ち入り直前に大石良雄が赤坂・南部坂の瑤泉院ようぜんいんのもとに赴くという「南部坂雪の別れ」は有名だが、事実ではない。
- 浅野家改易後に大石が瑤泉院に拝謁したのは、討ち入りからだいぶ前の元禄14年11月14日の一度のみだった。
- これは、大石が瑤泉院の結婚時の持参金の収支決算書を討入り直前に瑤泉院の用人・落合勝信に提出したことが元になっている。
- 討ち入り前夜にこれらの書類を大石良雄の命で届けたのは、後世に「義僕」と呼ばれた近松勘六の家僕の甚三郎である。
- そもそも瑤泉院は当時、南部坂には住んでおらず、同じ赤坂の今井町にあるお里方の三次みよし浅野家の下屋敷に引き取られていた。

・赤穂藩取りつぶしに関する収支について

収入の部		支出の部	
	万円		万円
現金有高	348,661	借入金（藩札）の返済	108,000
		給料	165,000
		退職一時金	71,000
		余剰金	4,661
	<hr/>		<hr/>
	348,661		348,661

討ち入りに関する収支

収入の部		支出の部	
	万円		万円
赤穂藩精算余剰金	4,661	仏事費（墓地代）	1,528
瑤泉院への返却金の一部流用	3,600	御家再興工作費	781
大石内蔵助より	85	江戸屋敷購入費	840
		旅費・江戸逗留費	2,976
		会議通信費	132
		生活補助費	1,585
		討ち入り装備費	144
		その他	360
	<hr/>		<hr/>
	8,346		8,346

収入の部の瑤泉院への返却金の一部流用(3600万円)とは、瑤泉院の持参金を塩田業者に貸して運用していた資金を回収（一億二千万円）したが、その内30%を討ち入り資金に流用し、残金は討ち入りの日に帳簿とともに近松勘六の家僕、甚三郎に持参させて返却したと言われている。

大石氏

- 大石氏は、元は関東の小山氏の一族だったが、近江の大石庄（滋賀県大津市大石）に土着して、大石氏を名のるようになる。
- その後、大石良信の代には豊臣秀次に仕えたが、秀次切腹後、笠間藩浅野家に仕えるようになった。
- 良勝は、大坂夏の陣での戦功が著しかったため、浅野長政の三男・長重の永代家老に取り立てられる。
- 浅野長重の長男・長直は赤穂に転封されたので、大石家も赤穂に移ることになる。
- 大石良勝の長男・大石良欽（よしたか）も赤穂藩浅野家の筆頭家老となる。
- 大石良欽の長男・良昭と岡山藩の重臣・池田由成の娘・熊子の間に、播州赤穂城内に生まれたのが大石良雄である。

- 大石良雄は延宝元年（1673年）、父・良昭が34歳の若さで亡くなったため、祖父・良欽よしたかの養子となった。
- 延宝5年（1677年）、良雄が19歳のおりに良欽が死去し、その遺領1,500石と内蔵助の通称を受け継ぐ。
- 延宝7年（1679年）、21歳のときに正式な筆頭家老となる。
- 貞享4年（1686年）には但馬豊岡藩筆頭家老・石東每公の18歳の娘・りくと結婚。
- 元禄元年、彼女との間に長男・松之丞（後の主税良金）を儲けた。
- さらに元禄3年には長女・くう、元禄4年には次男・吉之進が生まれている。
- 元禄13年6月には長矩が参勤交代により赤穂を発つ。

- 元禄14年（1701年）2月4日、浅野長矩は江戸へ下向する東山天皇の勅使の接待役を幕府より命じられた。
- 接待指南役は高家肝煎・吉良義央であった。
- 3月14日、江戸城では勅旨に対して将軍が奉答する勅答の儀が執り行われるはずであった。
- しかし儀式が始まる直前、松之大廊下において長矩は吉良義央に対して刃傷におよんだ。
- 尊皇心の厚い将軍・徳川綱吉は朝廷との儀式を台無しにされたことに激怒する。
- 長矩を大名としては異例の即日切腹に処し、さらに赤穂浅野家をお家断絶とした。
- 一方、吉良には何の咎めもなかった。

- そして、3月28日までには刃傷事件・浅野長矩切腹・赤穂藩改易といった情報が赤穂へと届いた。
- 良雄は籠城殉死希望の藩士たちから義盟の血判書を受け取る。
- 城を明け渡した上で長矩の弟・浅野長広を立てて御家再興を嘆願し、あわせて吉良義央の処分を幕府に求めることで藩論を統一する。
- また良雄は、紙くず同然になる赤穂藩の藩札の交換に応じて赤穂の経済の混乱を避けた。
- また藩士に対しても分配金の配分をおこなって、家中が分裂する危険の回避につとめた。
- 4月19日、赤穂城を明け渡す。
- 5月11日、良金は生母りくや弟吉之進、妹くうとるりの四人を連れてりくの実家、但馬豊岡の屋敷へ向かった。

- 内蔵助は赤穂城退去後、残務処理も終わった6月25日、生まれ故郷赤穂を後にした。
- その後、家族と合流し、山城国山科に隠棲する。
- ここで大石は幕府に対してお家再興の嘆願を、赤穂の遠林寺の僧祐海を通じて出している。
- それ以外の藩士達は赤穂に近い大阪、伏見、京都などに散らばった。
- 幕府の許可を得て赤穂に留まった者も多かったが、その場合は百姓や町人の格で居住する必要があった。
- 江戸詰めの藩士達はそのまま江戸に留まる者が多かったが、もう藩邸には住めないので借宅等して暮した。
- この頃までには大石に起請文を提出した同志は93人に増えていた。

- この頃から浅野家遺臣たちの意見は二つに分かれはじめた。
- 一つは奥野将監（1,000石組頭）ら高禄取りを中心にしたお家再興優先派
- もう一つは堀部武庸（200石江戸留守居役）ら腕自慢の家臣を中心に、小禄の家臣たちに支持された吉良義央への仇討ち優先派である。
- 前者は赤穂詰めの家臣が多く、後者は江戸詰めの家臣であることが多かったため、後者を江戸急進派とも呼んだ。
- 7月18日、ついに幕府は浅野長広にたいして広島藩お預かりを言い渡した。
- ここにお家再興は絶望的となり、幕府への遠慮は無用となった。
- 7月28日、良雄は堀部武庸なども呼んで円山会議を開催し、吉良義央を討つことを決定した。

- 一方の吉良は3月23日にお役御免となり、8月19日には呉服橋の屋敷を召し上げられて、江戸郊外の本所に移り住む事になった。
- 大名屋敷の多い呉服橋と比べ、人気のない郊外にある本所はずっと仇討ちに適した場所であった。
- 討ち入りをしやすくするために、幕府が吉良を郊外に移したのではないか、そんな噂が江戸に流れた。
- 幕府がなぜこの時期に屋敷替えを命じたのか？

「若老中（若年寄）もご存知のようでうまくいくと思う」という意味のことが「寺々への暇乞い状」に書かれている。

幕府は討ち入りについて承知して黙認していたのだろうか。

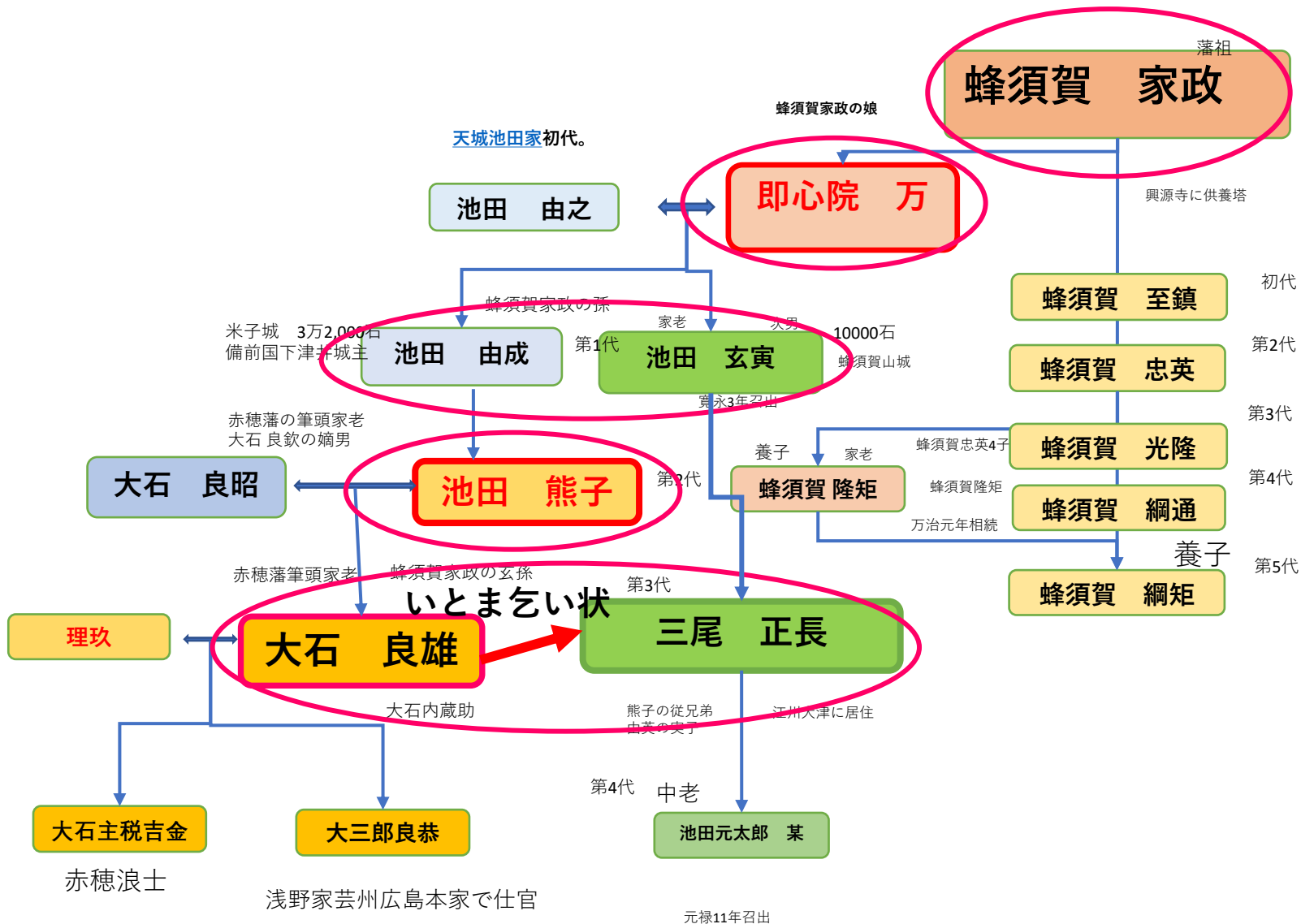
- なお、『江赤見聞記』によれば、吉良邸の隣に住む蜂須賀飛騨守は、赤穂浪士の討ち入りを警戒していて出費がかさむという理由で、老中に吉良を呉服橋内より移転させるよう嘆願したとされる。
- 刃傷事件後に、上杉綱憲が生母・富子を屋敷へ引き取る。
- 元禄14年12月に隠居した吉良上野介も本所屋敷には常住せず、桜田の上杉家上屋敷に住むことが多かった。
- 本所屋敷に常住していたのは、息子の義周よしちかだった。
- 当日、上野介が本所屋敷にいたのは、前日に茶会を催したためである。
- 「浅野も腹を切ったのだからあなたも切ったらどうです？」と富子が言ったというのも後日の創作らしい。

- 11月5日に良雄一行は江戸に入り、日本橋近くの石町三丁目の小山屋に住居を定めると、同志に吉良邸を探索させ、**吉良邸絵図面**を入手した。
- 茶人・山田宗偏から**12月14日に吉良邸で茶会**がある情報を入手。
- 良雄は確かな情報と判断し、討ち入りは同日夜と決し、討ち入りの大義名分を記した口上書を作成する。
- 12月13日に**良雄**は従叔父である**三尾正長**に「**おいとま乞い状**」を書く。
- **元禄15年12月14日**（現在の暦では1月30日）の未明。**47人の赤穂浪士**は本所吉良屋敷に討ち入った。
- 浪士たちは**吉良義央**を探し出し、これを**討ち果たす**。
- 一行は江戸市中を行進し、浅野長矩の墓がある**泉岳寺**で吉良義央の首級を亡き主君の墓前に供えて仇討ちを報告した。

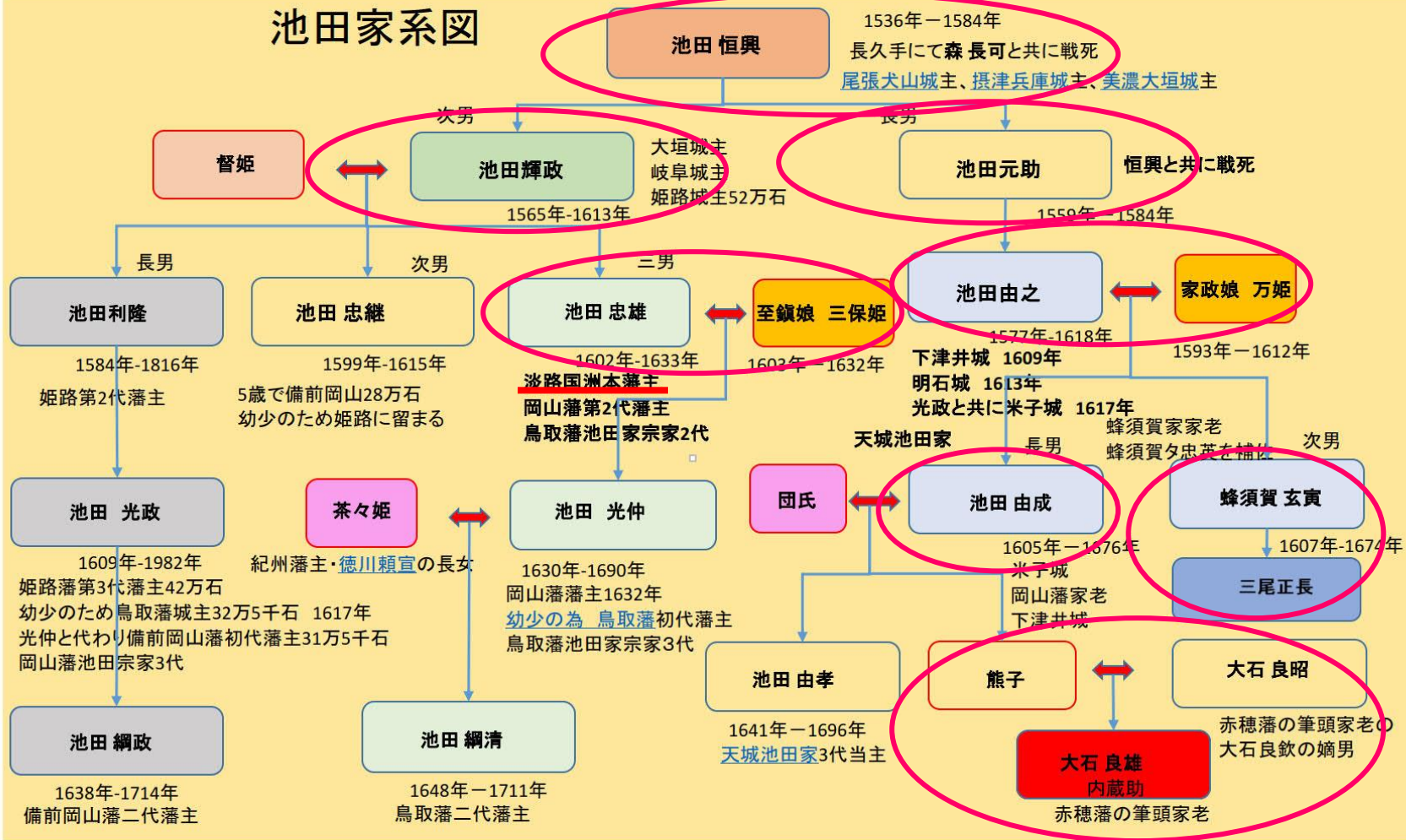
大石内蔵助の妻－理玖（りく）

- 大石内蔵助良雄の妻、**理玖**は現在の**豊岡市出身**。豊岡京極家の家老・石束宇右衛門と、佐々成政の子孫・快樂院の長女として生まれた。
- 松の廊下事件の後、一家は京都山科へ移り、元禄15年の4月頃、理玖は身重の体で長女のくうと共に豊岡に帰る。
- 良雄は討ち入りで罪が妻子に及ばぬよう、その年の10月初旬に離縁の形をとる。
- 吉良邸討ち入りは成功。夫と長男の主税が切腹した後、理玖は豊岡の正福寺で冥福を祈る生活を続け、香林院と名乗る。
- 赤穂の浪士たちの行為は人々に感銘を与えた。
- 赤穂**浅野家の本家**の広島に三男の**大三郎**は父・良雄と同じ**1500石**という破格の条件で**召抱えられ、理玖と一緒に広島へ**移り住んだ。

池田氏家、大石家、蜂須賀家相関図



池田家系図



池田家

池田 恒興（いけだ つねおき）

- 清洲会議に出席した4人の織田家重臣の一人。
- 尾張**犬山城主**、摂津**兵庫城主**、美濃**大垣城主**
- 天正11年の**賤ヶ岳の戦い**の後、**美濃国内にて13万石**を拝領し大垣城に入り、岐阜城に池田元助が入った。
- 天正12年、徳川家康・織田信雄との**小牧・長久手の戦い**では、秀吉方として参戦した。
- **長久手（勝入塚）にて戦死。享年49。**
- **嫡男の元助**も共に**討ち死**にしたため、家督は**次男の輝政**が相続した

池田 輝政

播磨姫路藩の初代藩主。

姫路城を現在残る姿に大規模に修築したことで知られる。

天正12年の小牧・長久手の戦いで、父の恒興と兄の元助が討死したため家督を相続し、美濃大垣城主13万石を領した。天正13年には同じ13万石で岐阜城主となった。

関ヶ原の戦いでは、岐阜城攻略の功績から播磨姫路52万石に加増移封され、初代姫路藩主となった。

また、次男・忠継の備前岡山藩28万石、三男・忠雄の淡路洲本藩6万石、弟・長吉の因幡鳥取藩6万石を合せ、一族で計92万石（一説に検地して100万石）もの大領を有した。

池田 忠雄

淡路洲本藩主、のち備前岡山藩第2代藩主。因幡鳥取藩池田家宗家2代。

播磨姫路藩主・池田輝政の三男。母は徳川家康の次女・督姫。

徳川家康の外孫であることから、9歳で淡路に6万石の所領を与えられた。

元和元年（1615年）、岡山藩主である兄・忠継が17歳で早世したため、その跡を継ぎ、洲本藩は廃藩とされ、淡路一国は徳島藩の蜂須賀至鎮にあたえられた。

蜂須賀至鎮の長女美保姫を正室に迎え、勝五郎、勝三郎をもうける。

忠雄は遺領38万石のうち、10万石を同母弟・輝澄や政綱、輝興らに分与し、自分は母・良正院の化粧料4万石を賜ったので、忠雄の領地は31万5,200石となった。

池田 由之（よしゆき）天城池田家初代。

- 天正5年、尾張国犬山で池田元助の嫡男として誕生したが、小牧・長久手の戦いで父は祖父・池田恒興と共に、討死した。
- 由之は8歳の幼子であったため、池田家の家督は叔父である池田輝政に引き継がれた。
- 輝政は由之を不憫に思い、成長後の慶長6年に播磨国**佐用郡**に**2万2000石**を与えた。
- 慶長18年に叔父の輝政が死去し、その嫡男の利隆が家督を継ぐと、由之も下津井から播磨国**明石城**へ移る。
- その利隆が死去すると、家督を継いだ光政は、因幡国鳥取藩へ移封させられる。
- これに伴い**由之も明石城から米子城**へと移った。

即心院 家政の娘 万

- 即心院 万は、天城池田家初代当主・池田由之の正室。
- 父は阿波徳島藩祖・蜂須賀家政。母は家政の側室の女。
- 妹弟に蜂須賀至鎮、阿喜姫（井伊直孝正室）、実相院（松平忠光正室）がいる。
- 池田由之に嫁ぎ、慶長10年に長男・池田由成、慶長12年に次男・池田由英（後の蜂須賀玄寅）を出産。
- 慶長17年2月5日（1612年3月7日）、備前岡山藩で没する。
- 享年20。法号は即心院殿梅岩宗清大姉。
- 徳島県徳島市の興源寺に供養塔が建つ。

池田由成

- 慶長10年（1605年）池田家家老・池田由之と万の子として生まれる。（蜂須賀家政の孫）
- 元和4年（1618年）に父・由之が殺害されると、かわりに米子城3万2,000石と「出羽」の名を相続して、池田光政に家老として仕えた。
- 娘の熊子は、赤穂藩家臣の大石良昭に嫁ぎ、赤穂事件で知られる大石良雄を生んだ。
- 熊子の姉に千子（池田直長室）、夏子（池田信成室）、弟に池田 由孝(玄蕃の父)がいる。

- **蜂須賀 玄寅**（別名 池田由英、池田玄寅。 ）
- 徳島藩蜂須賀氏の**家老**。山城守。知行10,000石
- **父**は岡山藩池田家家老・**池田由之**（元助の子・輝政の甥）。
- **母**は蜂須賀**家政の長女**・即心院**(万)**。姪に大石良雄の母**熊子**がいる。
- 寛永19年 藩主・**忠英の四男**・**隆矩を養子**とする。
- 承応3年 近江大津上大門町の西坊家屋敷で**実子・正長誕生**。
- 万治元年 **隆矩**に家督を譲り、京に隠棲。
- 寛文4年 **正長**と対面し**三尾氏**を名乗らせる。
- 延宝2年 京都で死去。享年68。

- **三尾 正長** (豁悟) 1654年 (承応3年) - 1713年 (正徳3年)
- 蜂須賀家の家老**蜂須賀玄寅** (池田玄寅) の嫡男。
幼名は竹麿。初名は正武。通称は官兵衛。号は豁悟。
- **大石内蔵助の伯従父で5歳年上。**
- 寛文4年 (1664年) 、**父玄虎、義兄隆矩と対面し三尾氏を名乗る**。
- 寛文10年 (1670年) に阿波で元服
- 延宝6年 (1678年) 、**隆矩の嫡男・龍之が4代藩主・蜂須賀綱通の養子になり、5代藩主・蜂須賀綱矩となる。**
- **豁悟は、元禄7年綱矩に拝謁し、粮俵米として200石と30人扶持を与えられたが、蜂須賀家には仕えず近江に暮らした。**



「忠」と「孝」

忠ならんと欲すれば孝ならず

主君に尽くすという「忠」は、親によく従うことを意味する「孝」とは常に食い違いを来す。

儒教の教えにより、「忠」よりも「孝」が重要だと考えられていた。

しかし、江戸時代となると、朱子学の影響で、逆に「孝」よりも「忠」の方が重要だと考えられ、武士道に影響を与える事になる。

武士は君主のためなら自己犠牲をいとわない(家族を犠牲にすべきだ)

主君の仇を討つという「忠」は、親への「不孝」であるとも言える。

大石内蔵助の「いとま乞い状」

- 討ち入り間近の渦中で、「義士」たちは多くの手紙を書き残してる。
- ことに江戸下向以後、「その日」が近づくにつれ、忠義に死する覚悟をあらわにしつつも、肉親の行く末を案じ、**親交の深かった**人々に後事を託す手紙（**暇乞い状**）を送っている。
- そこには、主君への「**忠**」と親類縁者への「**孝**」の**狭間で思い悩む**自らの本心が切々とつづられ、今なお読む者の心を打つ。
- 大石内蔵助が**花岳寺**の恵光和尚、**正福寺**の良雪和尚、**神護寺**に宛ててしたためた暇乞い状は「**寺々への暇乞い状**」と呼ばれ、大石の手紙の中でも最も著名なもののひとつだ。

寺々への暇乞い状



「道中御関所無滞少も心懸り之義無之下着仕候・・浪人共
追々下着、拙者も罷下り候

さた色々在之、若老中ニも御存知之旨ニ候得共何之御いろい
も無之うち破り候上は各別其通ニ被成置候事と被察候、亡君
之ため忠死ヲ感じ道理か何之滞少も無之、致案（安）堵罷有
候・・

家來左六幸七暇遣し指登せ申候間、一筆致啓上候、甚寒之砌、御座候得共各様、潮御堅固
 被成候半と珍重之御事存候、前々之通無相違寺社ノ等被遣候事に候哉、無心元存候
 一私在京之内何角不得心障候、而以番狀不得御意、御無音罷成候、兼而御聞及可被成
 候、十月始京都無異儀父子共下着仕候事に候、今日迄一段と兩人共無病に罷在候、
 賊以神ノ御加護難有喜悅、仕事に存候、在京之内は自公儀拙者に附人在之一、足も
 踏出候儀不成と、儲成方より閉合候杯、岡本柏谷等申候得共、不儲成義承止申事に
 不存若左様、に存候は、其節に丁儀可有之と、其手立致罷在候處道中は、關所少も
 心に懸、義無之下着仕候申談として、鎌倉へ立寄五六日、滯留夫より川崎近所平間
 村と申所に在宅、其後江戸石町致借宅父子十内、幸右衛門清助清左衛門金助半之
 丞次郎左衛門潮左衛門十三人に、而罷在候孫左衛門伊助は、平間村に、殘遣同志之
 者共廻町に、而四軒淡町源助町石町本所二軒都合十軒餘、五十四人借宅申候方角
 により、浪人共遣下着、拙者罷罷下り候、沙汰色々在之、御老中にも御存知之旨候
 得共、何之舞いろひも無之候、其處に被成置候事と、察候爲し、吾志死を感心し、道理
 如何之滑少も無之候、交際罷在候、折々上野御座候、行を承致、決心を確き途中を、心
 掛換へ共、不仕合に、御出合不申候、居居候にも、御老中を、入二三度、御申候處、御遠近
 近打込申事に候、此上首尾好致、而之本、被遣候、候、早間も在、聞、被遣候、其
 節之越、道而及御聞可被成候、上方に、而追々、懸心之者、共之、儀、其元、先、御申者、多存
 候、佐々小左衛門父上、無禮可有之候、上方に、而も、御本、次右衛門、相屋、左衛門、小山
 五左衛門、進、源、源、四、仕、方、不、及、是、非、人、外、之、事、共、早、々、様、之、事、共、申、も、罷、存、候、
 矣、野、宿、野、村、儀、兵、御、存、之、外、に、て、只、今、に、至、り、候、而、も、主、之、跡、源、左、衛、門、左、衛、門、了
 圓、増、と、存、候、御、當、地、へ、下、り、候、而、も、中、田、科、平、次、中、村、清、左、衛、門、錦、田、金、八、郎、家、孝、源、尾
 孫、左、衛、門、矢、野、伊、助、此、元、勝、手、に、而、田、中、貞、四、郎、小、山、田、正、左、衛、門、立、退、申、候、古、今、不、
 申、に、候、得、共、是、迄、聖、下、儀、處、右、之、通、懸、入、申、候、左、衛、門、儀、は、山、野、に、於、而、被、遣、御、指、止、候
 得、共、却、立、應、申、罷、下、候、而、懸、に、成、立、去、候、當、然、拙、者、外、聞、と、申、死、後、迄、も、喜、悅、申、候、處、
 無、是、非、次、深、に、候、右、之、品、々、申、入、候、申、に、而、も、無、之、候、得、共、資、件、候、此、度、取、遣、候、家、來、兩
 人、事、元、無、人、和、相、多、候、へ、共、其、儀、覺、得、を、不、惜、構、く、は、差、分、不、候、に、存、候、事、に、而、拙、者、亦
 命、も、候、は、し、此、兩、人、事、同、方、へ、なり、其、儀、心、申、安、座、申、候、に、性、直、度、程、に、存、候、に、も、立、可
 申、當、に、而、候、者、相、應、に、思、召、野、も、御、事、候、は、し、向、者、其、儀、御、首、筋、致、可、被、下、候、御、存、候、
 此、度、申、命、候、者、共、四、十、八、人、に、て、ケ、様、に、志、を、合、申、候、も、冷、死、院、願、此、上、之、御、外、聞、と、存
 事、候、死、儀、御、見、分、口、上、書、一、紙、御、使、候、御、實、し、遊、じ、候、何、も、忠、信、之、者、共、に、候、間、御、回
 向、を、も、被、成、可、被、遣、候、其、儀、に、而、生、死、儀、候、は、し、定、而、引、掛、され、御、事、御、仕、可、被、御、付、候、
 勿、論、其、政、人、々、御、信、之、事、に、候、可、被、御、心、見、候、御、種、子、御、聞、被、成、度、候、は、し、京、都、寺、井、立
 深、方、へ、御、尋、可、被、成、候、候、儀、子、能、々、存、在、在、候、事、に、候、所、又、拙、者、御、事、存、者、御、座、使、而、東、都
 より、離、別、仕、候、者、方、へ、懸、し、申、候、御、座、候、何、様、に、被、成、候、儀、夫、迄、之、事、に、候、併、父、元、に、形
 越、儀、而、承、候、へ、ば、次、男、吉、之、進、事、出、家、に、成、何、方、へ、か、道、候、由、に、而、不、存、御、事、に、候、以、後
 萬、々、一、紙、御、座、儀、願、に、罷、成、候、は、し、吉、之、進、事、は、一、度、武、名、之、家、を、懸、し、候、儀、に、仕、直、候
 事、に、而、少、は、心、慮、に、掛、り、申、候、此、後、も、存、御、事、に、候、得、共、八、性、凡、夫、之、拙、者、に、候、得、は、
 御、座、御、事、に、候、併、去、一、事、之、形、儀、に、而、成、候、儀、成、所、存、者、御、座、候、御、座、候、被、成、下、而、
 最、御、良、重、儀、へ、去、年、以、迄、之、御、座、御、無、失、念、不、任、真、に、存、御、座、度、當、然、之、儀、候、に、懸、成、者、次
 節、に、御、座、候、日、本、御、心、最、得、御、座、候、各、儀、別、道、御、座、候、御、座、候、御、座、候、御、座、候、御、座、候、御、座、候、
 口、死、後、在、々、之、批、御、取、々、可、有、之、と、存、候、候、知、真、御、坊、へ、も、同、然、に、申、度、候、道、科、寺、神、宮、
 寺、道、場、も、候、は、し、定、數、御、心、得、可、被、下、候、御、座、候、儀、云、

十二月十三日 大石内藏助良雄

- 「東下りの関所においても無事であり、心配していたことも無く下向できました。
- 他の同志も追々に江戸に入り、私も江戸に入りました。
これについては噂も色々あるようです。若年寄もご存じの様に思いますが、何のおかまいもありません。
- 私たちが亡君のための忠義の死と感じたのでしょうか、何の障害もなく、安堵しています」

(幕府は赤穂浪士が江戸に集結をしている事を知り、彼らに一挙のあるを予期し、かつ、討たせるつもりでいたと思われる
と、海音寺潮五郎は彼の史伝「赤穂義士」に書いている。)

- そして、暇乞い状には10月7日に京を発って江戸に出てからの経緯を述べて、近々討ち込んで本望を達する所存であると伝えている。

- ついで、書き付けるのも恥ずかしいことだがと断りつつ、上方・江戸での**脱盟者の名**を掲げ、今となっては当初から同志に加わらなかった者らの了簡の方がまだとまで言っている。
- また、討入り間近ということで暇を出した**家来の左六と幸七**のこれまでの働きを誉め、後事口添えを頼んでいる。
- そして、同志一同の**目的は亡君の面目を立てること**であり、死後見分のために用意した口上書の写しを送ること、いずれも忠義に厚い者たちであるから**回向を頼む**こと、等が書き連ねられている。
- さらに、離縁した**妻りくや子ども**たちのことにも筆は及ぶ。
ことに**次男吉之進**（きちのしん）について、「出家したと聞いたが、**武名の家**を継いでもらいたい」と心情を綴っている。
- 追伸として、「この書状は家来に持って行かそうと思いましたが、若し道中で障害にあってはと思い、私の死後**大津より**皆さんに届けるよう頼んでおきました」と書いている。（大津とは三尾豁悟の事?）

◎花岳寺（華嶽寺） 浅野家、大石家の菩提寺。

江戸時代初期の正保2年（1645年）、常陸国笠間藩より転封となった浅野長直が浅野家菩提寺として創建した。

◎正福寺 花岳寺を開山した秀巖龍田大和尚の隠居寺

多くの義士書状のほか、大石内蔵助が描いた両親の画像も保存され、境内には久岳庵が東海から移移されて浅野家三代の位牌が安置されている。

正福寺の良雪和尚と大石内蔵助良雄は親しく、「二良の対局」と呼ばれる囲碁仲間であった。凶報に接して内蔵助が教えを請うと「君ハズカシメラルル時は臣死ス」と言ったので内蔵助は決意を固めたと言われている。

◎神護寺（大石家ゆかり）山王権現社の神宮寺。

寺内に大石家の別荘があつた縁で、大石良欽（内蔵助良雄の祖父）寄進の手水鉢がある。

大石内蔵助から三尾正長(豁悟)に宛てた「おいとま乞い状」

- 大石内蔵助が討ち入り前日に心情をつづった手紙が残されている。
- 遺書に当たる「いとま乞い状」である。
- 1955年ごろに東京などで展示されていたが、その後、子孫が保管しており、約60年ぶりに徳島城博物館の公開となった。
- 日付は討ち入り前日の元禄15年12月13日付で、徳島藩家老 池田玄虎の子の三尾豁悟宛てだった。
- 国会図書館のデジタル文書「赤穂義士史料 下」で読むことが出来る。
- 少しでも、討ち入り前の内蔵助の心情に触れることが出来るだろうか。

赤穂義士史料下 国立国会図書館 昭和六年

一七七 大石良雄書狀

尙々同名主税も同前申度旨候、別而御殘多存計候、被掛御意□□相樂候、御志忝奉存候、御禮申候、此狀私死後御届申様ニ申置候、認置候、御披見後、火中可被成候、

一筆致啓上候、甚寒御座候得共、彌御家内御勇健可在御座、珍重奉存候、京都出足之節ハ、乍御暇乞以參得御意、御馳走忝奉存候、其砌茂委細御もの語申度事ニ存候得共、おからさまニ可得御意様無御座、故居住替申由申置罷立候、右之存念は、亡主仕合ノ義御聞及候通候、勿論時所不調法至極ニ付、御仕置被仰付候得共、傳奏御馳走之義ニ付、吉良(義兵)上野介殿へ合意趣申事御座候得共、大切之御馳走使ニ付、所存外罷在候處、於殿中當座難遇義御座候而、打果し申候、其節御扣留候御方御座候ニ付、討留不申、亡主末期之殘念、御心底家來共難忍、亡主鬱憤散申度、赤穂ニ而何茂必死之覺悟ニ罷在候得共、對公儀禱奉存、離散仕候、其節御目付江茂家中所存之通、有増申上候所、御老中様方へ申仰披露被遊被下候趣ニ付、時節を窺罷在候、當七月亡主弟大學(淺野長廣)齋州へ御預同事趣ニ候故、時節到來同志之者申合、上野介殿屋布江亂入仕候、家中一同之義もつ共志うすきもの共ハ跡にのこり、親切之者共四十八人、妻子親類後難ヲかゑりミス、右之所存ニ御座候、私身近キ岡山一家共ニ候得ハ、此一事申しらセ候義も無御座共、様子相知可申事ニ候得共、此趣ニ付、備前一家共へも、御通達可被下候、捕者下向ハ最早さた可承と存候、池左兵衛、七郎兵衛、此度無心之取替志之段不淺、第一用事迄達し、大慶申事候、不入義共申繼候得共、貴様御事、左兵衛御心易存候ニ付、心底のこさす申入候、且いか様之首尾と、世間之人口迄ニては、無御心元思召候儀、可在之と存、申入候、此上茂運叶、首尾好本望達し申度、一念迄御座候、爲御見分のこし置候、口上書、掛御目候、御披見後、火中可被下候、阿州へも可然御通達奉頼候、恐惶謹言、

大石内藏助

(元禄十五年)
十二月十三日

(花押)

赤穂義士史料

二四五

追而御心易得御意候、御暇乞ながら如此候、

三尾谿悟様

人々御中

尚々、同名主税（ちから大石 良金）も同前（どうように）申度旨（もうしたきむね）候、別而（とりわけ）残多存計（ありはからわせ）候、

被掛御意（ぎょいをかけられ）目貫相栄候、御志忝奉存候（かたじけなくぞんじたてまつりそうろう）、御礼申候、

此状 私死後 御届申様に 申置候、認置候、御被見（ひけん）後、火中可被成（なさるべく）候、

一筆啓上致候 甚寒（じんかん）御座候得共（ござそうらえども）、彌（ますます）御家内 御勇健表 御座在可 珍重奉存候（ちんちょうにぞんじたてまつりそうろう）、

京都出足の節は、御暇乞乍(ながら) 以参 御意ヲ得テ 御馳走
忝奉存候(かたじけなくぞんじたてまつりそうろう)、

其の砌(みぎり)モ 委細御もの語 申度事(もうしあげたきこと)
ニ存候得共(ありそうらえども)、あからさまに 可得御意様 御
座無(ござなく)故、居住替申由(もうすゆえ)申置羅立候

右の存念は、亡主 仕合の義 お聞き及び候 通候、勿論 時折
不調法至極(時節場所をわきまえざる働き、不調法至極) 二付、**御仕置**
仰せ付けられ候得共、

傳湊御馳走の義二付、**吉良上野介殿へ意趣**(恨み)含み申事御座候
得共、**大切な御馳走使**二付、**所存外罷在候**(まかりありそうろう)處、

殿中に於いて当座 難遁（逃れ難し）義 御座候而（ござそうろうて）（殿中においてその場で避けがたい思いがございましたのか）、討果し由候、

其節御拘留候 御方御座候に付（その時留めた人がいたので）、討ち留不申（討ち留めることは出来ませんでした）、

亡主末期の残念、御心底家来共忍び難し、（内匠頭の死に際しての無念の心情は、家来どもとして耐え忍び難い）亡主鬱憤 散申度（もうしたき）、

赤穂に而（しこうして） 何も必死の覚悟ニ 罷在候得共（まかりありそうらえども） 公儀に對し憚り（はばかり）奉存（ぞんじたてまつり）、離散仕り候、

其の節、御目付へも家中所存の通、有増申上候所、御老中様方へ申し、御披露被遊(あそばされ)被下(くだされ)候 趣(おもむき)に付、時節を窺罷在候(うかがいまかりありそうろ)、

當七月亡主弟大学(浅野長廣)義、芸州へ御預同事趣に候故(広島の本家にお預かりになったので)、時節到来、同志の者申合、上野介殿屋敷布へ乱入仕り候、

家中一同の義、もつ共 志うすきもの共は跡にのこり、親切の者共、四十八人、妻子親戚、後難を顧みず右の所存に御座候、(48人には、11日に逐電した「最後の脱盟者」毛利小平太が入っている)

私身近キ岡山一家(岡山藩池田家家老池田玄蕃)共二候得ハ、此一事申しらせ候義も無御座共(ござなくとも)、様子相知 可申事に候得共、此の趣に付き、備前一家共へも、御通達可被下(くださるべく)候

拙者下向は最早さた 可承(うけたまわるべく)と存じ候、

池佐兵衛、七郎兵衛、此度無心(借金)の取替、志の段(厚意)浅からず、

(岡山藩城代池田七郎兵衛政陽は母熊子の姉千子の子、小仕置池田佐兵衛信起は同姉夏子の子。内蔵助は二人から200両借りていた)

第一用事迄達し、大慶申事候、不入義(正しい事に入らない)共 申継候得(もうしつぎそうらえ)共、貴様御事、乍慮外(はばかりながら)御心易存候二付、心底残さず申し入れ候、

但いか様の首尾と、世間の人口迄二ては、無御心元(おこころもなく)思召(おぼしめさり)候儀、可在之(これあるべし)と存、申入候、

此上モ運叶、首尾好く本望達し申度(もうしたき)、一念迄御座候、

御検分の為、のこし置候、口上書、御目に掛け候、御被見後、火中可被下候(くださるべくそろ)、

阿州へも可然(しかるべく)御通達 奉頼候(たのみたてまつりそ
うろう)

(阿州とは、三尾の義兄・蜂須賀隆矩の子、徳島藩五代藩主蜂須
賀綱矩のことか?または三尾の息子で徳島藩中老の池田長亮か?そ
れとも、関わりのある阿波の人達の意味か?)

恐惶謹言、大石内蔵助

元禄十五年十二月十三日

追而(おって) 御心易 得御意(ぎょいをえて)候、御暇乞なから
如此(かくのごとく)候

三尾 谿悟様

人々御中

殘置候書付之寫

淺野内匠頭家來口上

去年三月内匠頭儀就

傳奏御馳走之儀、吉良上野介殿江合意趣罷在候處、於御殿中當座難遁儀、御座候朝及及傷候、不辨時節場所之儀、無調法至極に付、切腹被仰付領地赤穂之城被召上候儀、家來共迄畏入奉在、請上使之御下知城地指上、家中早速離散仕候、右喧嘩之節、御同席御抑留之御方有之故、上野介殿を討取不申、内匠頭未期殘念之心底、家來共迄難忍仕合に御座候、對高家之御歴々、揮擲憤候段、仰奉在候得共、君父之誓不可共戴、天之儀難默止、今日上野介殿御宅江推參仕候、備繼亡主之意趣志迄に御座候、私共死後若し御見分之御方御座候は、御披見奉願候、以上

元祿十五年極月 日

淺野内匠頭長矩家來

大石内藏助以下連名(略之)

浅野内匠家来口上 堀部弥兵衛起草 細井広沢の意見を聞いて完成

去年三月、内匠儀、**伝奏御馳走の儀**に付き、吉良上野介殿へ意趣を含み罷（まか）り候處、**御殿中に於いて**、当座遁（のが）れ難き儀御座候か、**刃傷に及び候**。時節場所を弁（わきま）えざる働き、不調法至極に付き、**切腹仰せ付けられ**、領地**赤穂城召し上げられ**候儀、家来共まで畏（おそ）れ入り存じ奉り、上使御下知を請け、城地指し上げ、家中早速離散仕り候。

右喧嘩の節、御同席御抑留の御方これ在り、上野介殿討ち留め申さず、**内匠末期残念の心底**、**家来共忍び難き**仕合せに御座候。

高家御歴々に対し、家来共鬱憤挿（はさ）み候段、憚（はばか）り存じ奉り候得ども、**君父の讐（あだ）**、**共に天を戴（いだ）くべからざる**儀黙止難く、今日上野介殿御宅へ推参仕り候。偏（ひとえ）に**亡主の意趣を継ぎ**候志（こころざし）まで御座候。私共死後、若し御見分の御方御座候はば、御披見願ひ奉り、斯くの如く御座候。 以上

元禄十五年十二月 日 浅野内匠頭家来 大石内蔵助

口語訳

昨年三月、伝奏ご馳走役について、吉良上野介殿へ意趣をもち、殿中においてその場で避けがたい思いがございましたのか、刃傷に及びました。

時節や場所をわきまえず、もっとも迷惑だったため、切腹を仰せ付けられ、領地赤穂城を召し上げられましたことについて、家来どもまで恐れ入っております。

上使の命令を受け、城地を差し上げ、家中の者どもは早速に離散いたしました。

この喧嘩の折り、ご同席していた方が止め、上野介殿を討ち取ることができず、内匠頭の死に際しての無念の心情は、家来どもとして耐え忍び難いことでございます。

高家に対して、浅野の家来ども刃傷事件の鬱憤を晴らすということには憚りがありますが、

「君父の讐(くんぷのあだ)は共に天をいただかず」(君父のかたきとともにこの世に生きていたくない。生命をかけても報復しないではいられない。)と言うように、黙止できず、今日上野介殿のお宅へ推参いたしました。

ただひとえに亡主の意趣を継ぐ志だけでございます。

私どもの死後、もし、お検分の方がいらっしゃれば、お上に見せて頂くようお願いいたします。

このようなことでございます。以上

十五年十二月 日 浅野内匠頭家来 大石内蔵助

赤穂浪士のその後

- 学者の意見と綱吉の決断で切腹が決まる。
- 幕閣や世論は浪士賛美と同情無罪論の中、学者の意見は二つに分かれる。
- **浪士賛美**（同情無罪論）
林鳳岡（ほうこう）、室鳩巢、三宅観蘭など。
- **法政論**（有罪処罰論）
荻生徂来、太宰春台、佐藤直方（**忠義と法律違反は厳格に区別すべき**）
- **綱吉の決断**
湯島に聖堂をおこし、自ら忠孝を説いた綱吉だが、天下の大法を破ったことには躊躇せざるをえず、**民意か法律か**で悩んだ末、一月二十日過ぎに「**切腹申しつけよ**」と断を下した。

- 赤穂浪士の遺子四人が伊豆大島へ流刑
- 旧幕時代まで「三族連座制」があったが、元禄の頃には弛み、男子の遺族だけが罰せられ、妻と女子及び僧籍にある男子は免除された。
- 46士の19遺児のうち流刑に該当する15歳以上の男子は4人で14歳未満の男子（15名）は15歳まで刑は猶予された。
- 刑が猶予された15名のうち10人と流刑の後恩赦された3人（1人は大島で死亡）は出家した。出家すれば家名や血脈は途絶えてしまう。
- 19人の遺児のうち、仕官の道が開けたのはわずか4人だった。
- 大石内蔵助の三男・大三郎、原惣右衛門の長男・十次郎、奥田貞右衛門の長男・清十郎と富森助右衛門の長男・長太郎のみである。
- 大石大三郎と原十次郎は、広島浅野本家に厚遇で召し抱えられた。
- 奥田清十郎は、祖母の出た阿波仁尾家を継いでいる。

赤穂義士二人を育てた母 「かめ」

- 赤穂義士の一人、近松勘六の継母で、同じく奥田貞右衛門の実母でもある「かめ」が、徳島藩士 仁尾清右衛門の次女であることが有名である。
- 仁尾家とは、蜂須賀正勝の正妻「まつ」の兄弟の益田氏の子孫。
- 撫養城城代の益田内膳の次男に鳩内膳正順まさよりが居るが、その子は豊後事件の後に仁尾清右衛門と名乗る事となる。
- その仁尾清右衛門の娘が「かめ」である。
- かめは、どういう縁か赤穂の近松家に嫁ぐ。
- 近松行生の妻は、勘六を生むが勘六が四歳の時に没する。
- その後、行生は「かめ」を娶り三男一女をもうける。
- その長男が、奥田孫太夫重盛の養子となる奥田貞右衛門。

近松貞右衛門(奥田貞右衛門)

- 貞右衛門は元禄7年、奥田重盛の婿養子に入る。
- 元禄14年刃傷事件の際には江戸にあり、養父・重盛が国許の赤穂に向かった後も貞右衛門は江戸に残った。
- この頃に奥田清十郎を儲けた。その後は父とともに行動し、深川黒江町に住んだ。本懐後、水野忠之の屋敷で切腹した。享年26。
- 貞右衛門は、遺児である清十郎を気遣い、自分の死後、その脇差を売ってかまわないと言い残している。
- 貞右衛門の実弟 官右衛門は母の実家阿波仁尾家の養子となり、妹は後に母かめと共に阿波に住む事となる。
- 清十郎は、のちに叔父の仁尾官右衛門の養子となり、その家督250石を継いで徳島藩藩士となった。

(87) 奥田貞右衛門書状

大石神社所藏

—暇乞い—

一筆令啓上候、先以其元相替儀無御座候、永呂院様
・清光院様弥御堅泰ニ被成御座候、貴様・お百御無
事ニ可為御暮と察入候

一拙者儀為内匠様御為と存亡命仕候、勘六殿ニも猶又
右之通御座候、清光院様・貴様・お百事嘸々御歎と
察存候、不及申候得共清光院様并お百事頼存候、且
又拙者世悴去比出生仕、名奥田清十郎と申候、彼者
無恙成人仕候奉頼候、猶為御暇乞如此ニ御座候、恐
惶謹言

十二月四日

奥田貞右衛門

仁尾官右衛門殿

行(花押)

尚々貴様江不存寄先年緩々と得御意是又大悦ニ奉
存候、且又ちい事も奉頼候

無生より何かとかいほうニあい成人仕候よし、彼
者ニも御心得頼存候

近松勘六

- **先妻の子** 近松勘六は山鹿流兵学に通じ、知略に富み、また情愛の深い人であった。**四歳の時に実母と死別し、十九歳の時に父と死別**している。
- 元禄十三年、浅野内匠頭に従って江戸入へ下っていたが、在府中に刃傷事件が起こり、江戸屋敷を引き渡し、急遽赤穂に帰り義盟に加わった。
- 赤穂戸嶋新田に住んでいた**乳母宛に、いとま乞い状と形見分けの積もりか手持ちのあり金と自分の衣類**を送っている。
- また、阿波蜂須賀家に仕える**異母弟の仁尾官右衛門**に手紙を送って**義母の永昌院に感謝**すると共に、**異母妹の「お百」の将来を頼む**など知略と情に富み、しっかりした人物だった。
- 勘六は遺言で、「谷中の長福寺にいる弟の文良に今日の様子を伝えて欲しい。また小者の甚三郎にも伝えて欲しい」と言い残している。

— 京都滞在短く文にて御礼 —

一筆申入候、まつ／＼そこもと作兵衛をはしめふたりともにいよ／＼そくさいニ御暮し候よしまんそく申候、此方の事なにかとあんし被申候よし必々御あんし候ましく候、われら事此八月ニかミがた立かへり申候へとも、又かなはぬ用事ゆへさつそくゑどへまいり申候、ざいしよより上方ニ足を留る申候ハ、そなたも御こし候様ニいたしたきとそんし候へとも、はるより江戸へまいりかなたこなたといたし申候ゆへその事もなく、又江戸へまゐりさて／＼なつかし

くそんし候、大かたもはやゑあひ申ましく候、去年よき時分ふしミへ御こしあひ申候而今にまんそく申候、まつ申候、われら事幼少より母におくれ候所に、わけてそなたなにかといたはり候て成人いたし、今にそなたの心さしともよのつねよりわれらへしんじつなる心底まんそく申候、れいのほと筆にも申かた候、そなた一代何卒介抱いたし度おもひ申候ニ、不仕合にてろう人いたし近頃残念ニそんし候、さりなから何事も前世の約束と覚しめしくたさるへく候、作兵衛へも申候、ねんころニいたされ御心さし満足申候、御礼申かたく候、ふしあはせにてか様ニろう人いたしそなたふたりへもわかれ近頃残り多く存候、うば事われら事きゝ申候てさそ力なくなげき可申候まゝひとへにそなたのミ入申候

一 はやミ藤左衛門殿さきころそこもとへ御こし候ゆへふミたのミ申候、心さしまてニ金子貳朱送りまいらせ候、相届申候よし満足いたし候、藤左衛門殿そこもとへ御こし候へハなにかとそなたふたりともちそ

近松勘六から乳母とその夫・作兵衛へのいとま状

う候てねんころに申され候よし、くわしく藤左衛門殿御物かたりにて候、藤左衛門殿も事のほか悦候てわれらよりよろしくれい申つかハし候様ニ被申候

一藤左衛門殿御もとり候しふんそなた手おりもめん御こしおひにいたし申候様ニ御申こし、ちかころ心さし満足申候、すなハちおひにいたし申候、心ざしハまんそく申候へともけつくまい／＼なにかといんきん御こしいたミ入申候

作兵衛へ申候

一うはも作兵衛ニもしたひニとしより申され候まゝ一しほわれら事か様になりまいらせ候あとにてたよりなく候はんと存候、其段ぜひにおよび不申候

うばへ申候

一文しんし申候しるしまでニ此たび金子壺兩進し申候、誠に心さしまてに候

うばへ申候

一さいぜんよきたより候ゆへあはせ壺、かたびら一、じばん一進候、つづらハそこもにて去年はるそなたのつづら壺ツかり申候、此方ニも入用なく候ゆへさいせんのたよりニゆうかんさま迄たのミ進候、相届申候哉承たくそんし候、たゝなつかしきよりほか

なく候、かしく

十一月廿一日

ちかまつ

かん六

作兵衛殿

おうば殿

参

かへす／＼こま／＼と申度候へ共なにかといそかしく候ゆへあら／＼申まいらせ候、かしく

かめの夫、近松行生は、勘六が19歳の時に亡くなっている。

勘六と貞右衛門が下向した後、討ち入りの前に、かめは娘のお百と孫の清十郎を連れて、阿波の仁尾家に養子に入っている息子の仁尾官右衛門の所に身を寄せた。

清十郎は、官右衛門の養子となり仁尾家250石の家督を次ぐ。



かめとその夫、近松行生の夫婦墓が、徳島市の慈光院に残っている。

番外 牟岐平右衛門

- 忠臣蔵で重要な役割を演じる一関藩田村家の御留守居役、**牟岐平右衛門**は、**牟岐城主の子孫**だった。
- 牟岐城は、元龜年間に牟岐大膳允により築城される。
- 天正3年長宗我部元親の軍勢が海部城を攻め落とすと、大膳允は人質を出して降伏し、中富川の戦いでは、牟岐右京進が長宗我部勢として参加。その後、**伊予正木の加藤嘉明**の元へ行く。
- そして、**松山城**から**会津若松城**(43万5500石)へと加藤嘉明に従うが、嘉明の死後嫡男の明成が改易され、**庶子の秋友**が**近江水口藩**(2万石)に封じられる頃、牟岐大膳允の子孫である牟岐平右衛門は**一関藩**に仕官し江戸詰めとなる。
- 赤穂事件で、**浅野内匠頭**を江戸城から**田村邸**へと迎えている。

牟岐町ゆかりの一関藩士・牟岐平右衛門(むき・へいえもん)の子孫に当たる小野寺蒼(れい)さん(85)＝岩手県一関市、旧姓牟岐＝が、平右衛門を主人公にした歴史小説「火 みちのく一関忠臣蔵」を自費出版した。平右衛門が赤穂

藩主の切腹に携わった史実を題材に、藩主や赤穂浪士の生き様に思いを巡らせる物語。一関や牟岐に関する史料を参考に執筆した小野寺さんは「祖先にまつわる小説が書けてうれしい」と話している。

一関藩で浅野内匠頭切腹に携わる 牟岐ゆかりの武士 小説に



小野寺蒼さん

主君をくつした武士たちの

小野寺さんは平右衛門や、戦国時代に牟岐城(牟岐町)を治めていた牟岐大願允虎房の子孫に当たる。虎房は天正3(1575)年に長宗我部石親によって牟岐城を滅ぼされた後、伊予松山藩主の加藤嘉明に仕えた。その後、加藤家が失脚していく中で、優秀な平右衛門が一関藩に引き抜かれたという説がある。

小野寺さんは大学生の頃から創作活動を始め、主婦業の傍ら小説や詩、エッセー作品を出版している。「火」を執筆するために、一関市の博物館などにある史料から一関と赤穂の関わり

戸屋敷で切腹した史実を題材にした。作品では、切腹の準備を担った平右衛門が、幕府の命令で簡単に命が奪われる不条理を嘆き、

子孫の岩手の女性 自費出版
「忠臣蔵別の角度から」



小野寺さんが執筆した小説「火 みちのく一関忠臣蔵」

気持ちを思いやる。平右衛門の家系や阿波国、牟岐城などに触れる場面もある。小野寺さんは「美談で語られることが多い忠臣蔵を別の角度から見せたい。徳島の方にも親しみをもっと読んでほしい」と話している。「火」は四六判、327ページ、2千円(税抜き)。購入などの問い合わせは発行所の勝たき書房(電話03(5740)0100)。

「火 みちのく一関忠臣蔵」

物語の主人公は一関藩士牟岐(むき)平右衛門。小野寺(旧姓牟岐)さんの先祖にあたり、元禄期に江戸屋敷の御留守居役を務めた。

幕府は江戸城で刃傷(にんじょう)事件を起こした内匠頭を一関藩主の田村建顕に預け、屋敷内の庭先で切腹させる。平右衛門は他の藩士らと城へ内匠頭を迎えに行き、その最期の時も藩邸に控えていた。

結び

江戸時代から幕末まで、阿波徳島では目立った動きもなく、世間から注目されることが少ない。

しかし、徳島は、日本の歴史の中で重要な役割を担ってきている。

我が郷土の歴史を深く知ることにより、私達が生まれ育った徳島を愛する気持ちが育まれることを願わずにはられない。